

無力の底で

著者	佐々木 勝彦
雑誌名	大学礼拝説教集
号	12
ページ	35-40
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024512/

「無力の底で」

大学宗教主任 佐々木 勝彦

詩編、第八章五節

5 人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは

詩人は「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの」と歌っています。

なぜかこの詩には太陽が出てきません。

詩人は、夜空を見上げているようです。しかしその具体的な場面となると、もうひとつはつきりしません。私たちの経験では、月と星が同時にくっきりと見えることは少ないからです。したがってこの詩は、一度ならず「繰り返し」夜空を見上げる中で生まれた可能性があります。

悲しかったのでしょうか。それとも悔しかったのでしょうか。

しかも、月も、星も、神の被造物であると歌っています。古代世界においてこれは驚くべきことです。古代の農耕民にとって、また遊牧民にとっても、月の満ち欠けと星の位置は生きるうえで欠くことのない知識であり、月も星も神々に等しい存在だったからです。

さらに詩人の眼は、神の創造された天から地へと、つまりこの地に立つ人の子へと移行して行きます。しかもこの詩人は、夜空を見上げながら、自分の「ちっぽけな存在」を思い起こし、感傷に浸っているわけではありません。大宇宙を前に、今日一日のストレスを解消しようとしているのでありません。

かつて聴いた「聖書の言葉」を思い起こしているのです。それは旧約聖書の創世記一章二六節以下に記された人間の創造に関する記事です。詩人はすでに小さいときにこれを学び、自らの生きる支えとしてきました。いま彼は、その親しんできた言葉を口ずさんでいます。

「神に僅かに劣るものとして人をつくり

なお栄光と威光を冠としていただけ

御手によって造られたものをすべて治めるように

その足元に置かれました。

羊も牛も、野の獣も

空の鳥、海の魚、海路をわたるものも」。

これは、「人間とは何か」という問いに対する聖書の答えです。人間とはすべて、つまり王のよ

うな特別な人間のみならず誰もが、神にかたどって創造された被造物であり、「地を従わせ、すべての生き物を支配する」存在なのです。この地も、すべての生き物も、もちろん人間と同じく神の被造物であり、人間の所有物ではありません。したがってここで言う「従わせよ」「支配せよ」との命令は、神の被造物として「管理せよ」という意味です。人間は管理者であっても、決して所有者ではありません。人間はマネージャーであっても、オーナーではなく、マネージャーらしく生きることを期待されています。

管理者の仕事、それは、所有者の意図にふさわしく、託されたものを管理することです。それが管理者の責任です。人間は、この意味で創造者の意図にふさわしく世界を管理する責任を問われているのです。

それにしても詩人はどうしてこの聖書の言葉を口ずさんだのでしょうか。そもそもなぜ天を仰がねばならなかったのでしょうか。どんなつらいことがあったのでしょうか。

二、節以下の言葉その理由を示唆しています。

「天に輝くあなたの威光をたたえます

幼子、乳飲み子の口によって

あなたは刃向かう者に向かって砦を築き

報復する敵〔岩波訳・敵なる復讐者〕をたち滅ぼされます」。

詩人は明らかに「敵」に追いつめられ苦しんでいます。苦境に立たされて、天を仰いでいます。しかしこの敵が具体的に何を指しているのか、残念ながら分かりません。

もっと分からないのは「幼子、乳飲み子の口によって」という句です。この句をすぐ前の「天に輝くあなたの威光をたたえます」にかけて読むのか、それともすぐ後の「あなたは刃向かう者に向かって砦を築き」にかけて読むのか。どちらの解釈も可能です。前者の場合には、「幼子、乳飲み子」が「たたえる」ことになります。後者の場合には、神は、「幼子、乳飲み子」のような最も弱い存在をもって救いの業をなしとげ、敵を征圧することになります。

特に後者の場合、救いの業は、「力」ではなく、「非力」あるいは「無力」を通して実現されることとなります。もちろん私たちは、この「無力」の発見に詩人の救済体験を重ねて読むことも可能です。

この箇所を関根氏はこう訳しています。

「あなたは嬰兒（みどりご）、乳飲み子の口に

力の基を置き、敵に備えたもう。

仇する者、敵する者を鎮めんがため」。

ここまで来ると、詩人が天を仰ぎ、月や星を見上げながら、創世記の言葉を思い起こしている様子が浮かび上がってきます。それは、「無力の底で働く創造者」の声を聴く体験であると同時に、自らの「存在価値」の発見の体験でもあります。

詩人の心には、幼いときから慣れ親しんだ聖句が、慰めと祝福に満ちた約束として響いています。そして詩編八編の最後では、冒頭のあの創造の讃歌が繰り返されています。

「主よ、わたしたちの主よ

あなたの御名は、いかに力強く

全地に満ちていることでしょう」と。

この創造の讃歌は、詩人の痛みと苦しみの体験が、そしてどうしようもない嘆きと呻きが、「わたしたち」によって宇宙的視点から共有され、共感されていることを示しています。

たしかに、私たちはかつての詩人のように、これほど素朴に「創造の讃歌」を歌えないかもしれ

ません。自然環境の破壊は歴然たる事実であり、月の資源をめぐる競争あるいは戦争さえも、予想されるからです。しかしこれも人間の「管理責任」の問題であることを思い起こすならば、どうでしょうか。被造物の「うめき」（ローマ八章）は、「無力の底に」働く神の力によってのみ克服されます。

「人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは」（詩編八・五）と告白する人間の誕生こそが、今、求められているのです。詩編第八編は、現代への問いかけであると同時に、その解決への道を指さしています。かつての詩人やキリスト者と同じように、私たちもこの詩編を繰り返し口ずさみながら、自らの道を行きたいと思えます。

祈りましょう。

イエス・キリストの父なる神様、私たちにもこの詩人のように「無力の底」であなたのみ業にふれる機会が備えられていることを信じ、この現実へと踏み出す勇気をお与えください。

十字架と復活の主の御名を通して祈ります。アーメン